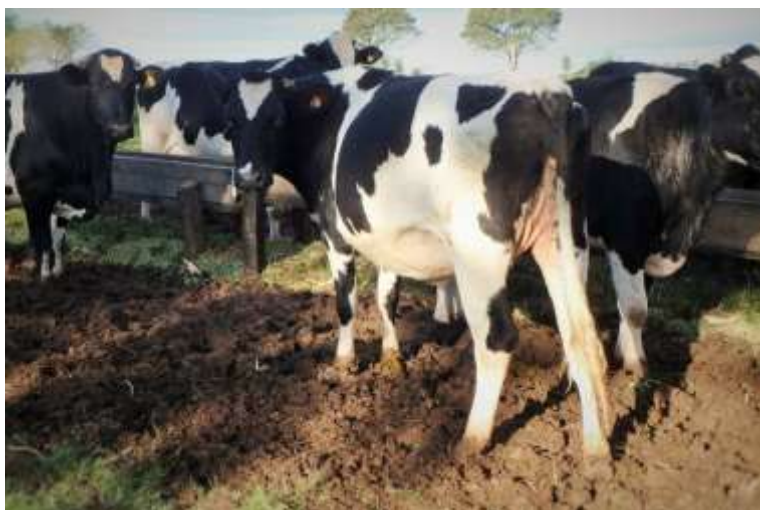


## 酪農家の決断。

弓削 比紗英

普段一緒に活動を行っている酪農家さんのもとへ、新しい乳牛がやってきました。

見た目もかなりホルスタインに近い未經産牛（まだ出産を経験していない牛）で、人工授精によりジャージー牛との子供を妊娠中。



稼ぎ頭になるであろう、前途有望な女の子です。

パラグアイでは乳生産よりも肉生産が盛んです。

そのため、多くの人が所有している牛も肉用種であり、肉用種を育てるついでにお乳のでそうな牛から牛乳を搾ろう、と酪農業を始めた人も多数。

その結果、小規模酪農家が所有している搾乳牛の大半も肉用種です。

もちろん、肉用種は肉を取るために改良されてきた種であるため、どれだけ良い状態を保っても、その乳量はたかが知れており、平均で1日2～5リットルほどです。

一方、今回酪農家さんが購入した牛は、牛乳を取るために改良されてきたホルスタイン種の交雑種であり、肉牛系3頭でようやく搾ることのできる10リットルをたった1頭で生産し、さらにそれ以上の乳量が期待できます。

酪農家さんに牛探しを頼まれ、見つけ出したこの牛の値段は4,000,000グアラニー。

ありがたいことに、もともとは 5,000,000 グアラニーだったものを、「普段活動を頑張っているようだから」と 1,000,000 グアラニーもまけてもらえました。

この 4,000,000 グアラニーとは、日本円になおすと 8 万円ちょっと、牛 1 頭の値段だと考えれば高い買い物ではないかもしれません。

しかし、任地での平均月収が 1,500,000 グアラニーほどであることを考えると、月収 2 倍以上の金額と、なかなか簡単に進む話ではありません。

そんな中、この酪農家さんはもともと家で飼っていた肉牛種の搾乳牛を売却、購入資金を手に入れ、購入にこぎつけました。



(新しくやってきた牛と酪農家さん)

「新しいものを購入する。」

なんて、普通のことですが、私にとって今回の出来事は少し意味合いが違います。

自ら投資をしようとはせず、市役所や県庁、その他関係機関に「乳牛が欲しい、牧草の種が欲しい」と頼み、もらえなければ「何も支援してくれない、もう何年も待っている」と文句ばかり言っている酪農家さんをたくさん見てきました。

このような人達もいる中で、自分から行動を起こしたこの酪農家さんには感服です。

私の帰国日が 8 月 23 日なのに対し、この牛の出産予定日は 9 月。

一体何リットルの牛乳を出すのか、見届けることができないのは残念ですが、ルシーと名付けられたこの牛がたくさんの牛乳を出して、少しでも酪農家さんの手助けになってくれれば、と願うばかりです。